上高井教育会報

第174号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　宮前日王
編集人　会報編集委員長　越忠男
印刷所　須坂新聞社

改革実践の年

上高井教育会長　宮前　日王

上高井教育会は、明治十八年（一八八五年）二月の創立ですから、本年は一一二年目に当たります。本年度会長をお引き受けすることになり、責任の重さをひしひしと感じているところです。この一一二年の伝統を生かしつつ、教育会の活性化を図ることが本年度の課題であると考えていますので、会員のご協力をぜひお願い致します。

◇　◇　◇　◇

学校教育は今幾多の課題をかかえています。中でも最大且つ緊急課題は、いじめ・不登校・非行対策であり、心の教育であると思います。どの子にも生きる張り合いを持たせ、心の居場所のある学校・学校づくりは急務です。

現在、国段階では教育改革論議が盛んです。第十五期中央教育審議会第一次答申以後「ゆとり」と「生きる力」は巷に溢れていますが、大事なことは〝内からの改革〟ではないでしょうか。

本教育会では、今年を「改革実践の年」と位置づけ、数々の改革に取り組んでいます。これらの改革が真に会員や子ども達のものとなり、諸教育課題の解決に寄与できることを願っています。

◇　◇　◇　◇

谷川彰英先生を中心講師にお招きしての研究も六年目を迎えました。昨年まとめをしましたので今年は新たな出発の一年です。本年度から、数年後にまとめ集を発刊することをしません。今年の成果は会員一人ひとりが本年度の内に獲得していただきたいと思います。

研究授業を通しての授業研究会も年一回にしました。学校の枠を越えて共同研究する上高井の良さを生かしつつ、各校独自の課題解決にも取り組めるようにと考えた結果です。

授業研究会で谷川先生ご自身に司会をしていただくことも新しい試みです。九月二日の日野小での特別活動での研究会で早速司会をしていただきます。たくさんの先生方が参加して下さるよう紙面を借りてお願い致します。

また、前泊の節は、宿舎でできるだけ多くの先生方と語っていただくようにと考えています。谷川先生ご自身による授業や、授業研究会後の慰労懇親会への参加なども今後積極的に取り入れていきます。

研究テーマも「自ら課題を持って追究し、学ぶ喜びを味わえる授業」と捉え、児童生徒の学ぶ喜びを前面に出しました。いじめ・不登校・非行の問題解決も、帰するところは私たちの授業改善にあると思います。谷川先生提唱の「参加参画型授業」を積極的に取り入れ、内からの授業改善を目指し、児童生徒が喜びを味わうことのできる授業を創造してほしいと思います。

◇　◇　◇　◇

教育で大切なことは、先を見通した高い理念と実践です。今こそ私たちは強い決意と情熱を持って、父母・保護者・地域の方々の協力を得て、愛をもって子どもと接し、私たちの育てた「児童生徒を見て下さい」と胸のはれる学級・学校づくりに励む必要があります。

本年度考えている改革の方向が、教育会の活性化、ひいては会員の先生方の力量向上、児童生徒の生きる張り合いになることを願っています。会員の積極的な取り組みをお願いします。（墨坂中）

教育会だより

4・1　選挙公示（役員選挙）
4・2　第1回代議員会　第2回選挙管理委員会
4・4　理事長選挙　第3回選挙管理委員会
4・8　第2回代議員会　第4回選挙管理委員会
4・9　副理事長選挙　第5回選挙管理委員会
4・10　理事　信教常任委員信教代議員選挙　第6回選挙管理委員会
4・15　第1回常任委員会
教育研究集会三団体発足会
4・23　教育会監査会
5・1　第3回代議員会・新任者会員歓迎会（新任者会員11名）第7回選挙管理委員会
5・2　監事選挙　第8回選挙管理委員会
5・6　第2回常任委員会
5・6　研究総委員会・同好会発足（於須坂小学校）
5・8　第1回研究委員会世話係・委員長会
5・17　教育会定期総会・講演会（於墨坂中学校）
○平成8年度会務並びに決算・平成9年度事業計画並びに予算の承認
講演／講師　谷川彰英先生（筑波大学教授）
演題「学び」の時代の新しい教育観
○会員意見発表　片桐秀一教諭（相森中）
「技術教室の子どもたち」
6・3　第3回常任委員会
6・8　第111回信濃教育会定期総会（小諸市文化センター）本会から18名参加
6・26　第4回代議員会
7・23　上高井教育会報174号発行

活気ある研究委員会の活動を目指して

研究委員長　重倉　紘一

上高井の小中学校は、いずれも中小規模校です。教育会には、十七の研究委員会があり、会員はいずれかの研究委員会に所属して研究活動をします。学校単位ではできにくい、教科の専門性をともに追究しあい、切磋琢磨することは、私たちにとって大切な研修の場ですが、今年度から研究日年二回が、一回となります。これは、学校五日制の実施に伴い、校内研究会もままならない状況の中で、授業時数を確保するためにも、やむを得ない選択でした。

しかし、現在の教育界や教師に対する社会の目は、そう甘くないことをお互いに自覚しなくてはなりません。

上田薫先生は、「信州教育はよみがえるか」という文章の中で、「今日、信州教育界の現状は、往時に比してあまりにもさむざむとしている。おしなべて指導の気力の衰えということであろうか。腹底から起こる凛とした活力がない。一人ひとりの子どもと裸になって取り組もうとする気迫が乏しくなっている。」と厳しい。

また、大村はま先生は、「教師という仕事は、手持ちの材料だけでも、何とかその日を過ごすことができる危険な職業である。」と教師の研修の大切さを解かれている。

年六回の小委員会と年一回の研究日を、どう充実を図るか、私たちは真剣に考えなければいけないと思います。

「授業研究は、毎日の実践と研究の連続でなければならない。研究授業のため、見せるためのものではなく、あくまでも子どものため、自分のためのものでなくてはならない。」わかる授業、魅力ある授業をめざした教師は勝負する。指導の成果は「わがクラスの子どもを見てください。」このことを根底において取り組みたいものです。

私たち教師は、よほど謙虚で、自省と向上の心を持った人でない限り、いい気になりがちなものです。その弱みを補うために研究授業を行います。「他人の目」を意図的に取り入れ「自分の目」を矯正し、治療し、機能アップしていこうとするために研究授業をしますが、参観者の質が低く、互いに批判を嫌うような空気が濃ければ、効果はありません。「より高い授業を身につける」という目的をしっかり踏まえて、真剣で遠慮のない鍛え合いができる教師集団をめざして、郡の研究委員会の活動の活性化を図っていきたいものだと思います。（仁礼小）

「創造する数学」を求めて

相森中学校　数学科

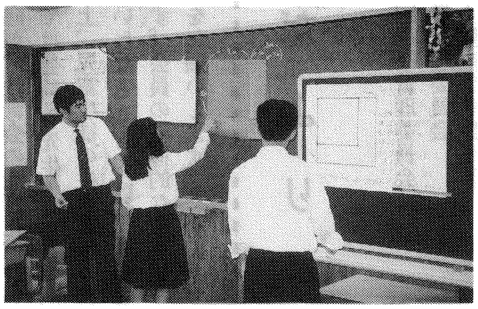
本校数学科では、十一月に行われる県算数・数学教育研究大会に向けて、研究を積み重ねています。「自分の考えで追究し、数学的見方考え方のよさを感得できる生徒を育てる指導はどうあったらよいか。」というテーマを掲げ、数理を追究する中で考えたことを自分なりに表現したり、自らの力で数理を追究することによって数学を創り出していく力の育成を図っていきたいと考えています。

そのために、一時間の授業中で、個人追究の後に自分が追究してきた過程を振り返り、自分なりにまとめる場面を設定したり、全体追究の時にそのまとめたことを生かして説明し合う場面を設定することを考えました。また、数学を創り出していこうとする意欲を高めていくために、より多くの数学的見方考え方に触れられるような指導場面を考えています。

例えば、二年生の連立方程式の解き方を学ぶ場面では、解き方を教師が教え込むのではなく、生徒が自ら考え、発見していく喜びを感じさせることを大切にしました。基盤目状の街で縦一区画をｘｍ、横一区画をｙｍとして二つの条件を与え、連立方程式を立て、本時ではそれを解くという学習問題を設定しました。生徒たちは、二つの式をなんとかうまく処理して解いていこうとするが、なかなかうまくいきません。しかし、図で考えた生徒の「二つの条件をひくと、縦二区画分の長さが求められる。」という説明をヒントにして、式でも引き算をすればよいことに気付いて、課題を解決することができました。

この授業でわかったことは図や式などいろいろな追究方法があるが、それぞれのやり方は違っても、その中にある考え方は同じである、ということです。このような学習経験を積んでいくことによって、生徒たちは数学を創り上げていく喜びを感じ取ってくれるのではないかと考えています。

七月には三年生の二次方程式の単元で、十一月には二・三年生の関数分野で授業を行う予定ですが、さらに研究を深め、実り多いものにしたいです。（小松　保裕）



平成９年度　県外視察者　上高井教育会

学校名	氏名	視察目的	視察方面	実施予定
日滝小	高橋　明子	堀川小学校の公開授業と研究会への参加	富山県堀川小	５月28、29日
仁礼小	宮崎美代子	堀川小学校の教育研究実践発表会参観	富山県堀川小	〃
仁礼小	中邨　恵子	堀川小学校の教育研究実践発表会参観	富山県堀川小	〃
仁礼小	宮坂　周吾	体育の授業参観をして毎日の実践研究を深める	関東方面	１２月
高山中	平野真理子	創造的に取り組める日本音楽の指導のあり方	関東（東京）	９～１０月
高山中	佐々木清一郎	教科における生徒指導	東海（愛知）	１０～１２月
墨坂中	小林　将伸	英語科の指導の研究	関東方面	２学期
森上小	中島　悦子	道徳指導の「再現構成法」の授業の研究	千葉方面	６月
小布施中	小松　修二	算数・数学指導法研究と学級作りの実際	安東小学校	未定
相森中	宮下　正己	日本美術教育学会学術研究大会静岡大会	静岡	８月中
相森中	涌井　裕一	千葉県松戸市の保健室登校生を中心にした授業参観	千葉県松戸市	１０月頃
井上小	児玉　明代	文部省指定研究　公開国語授業研究会	筑波大付属小	８月２・３日
豊丘小	大和　正秀	コンピューター教育の視察	北陸方面	１０月
小山小	鷹野　俊江	公開授業及び研究会に参加し日頃の実践に役立てる	関東方面	１１～１２月
豊洲小	清水　伴正	国語の授業における発問と問題解決	奈良女大附小	１０月
東中	山岸由美子	英語科の指導の研究	関東方面	１０月
須坂小	五味　隆	国語教育の「聞く・話す」の指導のあり方	未定	未定
須坂小	山岸　利樹	国語の「聞く・話す」の指導法を探り授業に生かす	未定	未定
高甫小	田中　尚子	国語科指導法研究として授業・研究会・講演会参加	大阪方面	８月１９日
高山小	斉藤　誠吾	体育科における評価のあり方の研究	新潟方面	８月～９月
墨坂中	土屋さつき	生徒指導、自主性・主体性を育てる指導のあり方	関東方面	２学期
墨坂中	斉藤　澄人	絵画分野における指導のあり方	関東方面	２学期
栗ガ丘小	石栗　亜紀	音楽の授業で児童が意欲的に取り組む姿とその指導	東京方面	１０月中
栗ガ丘小	波多腰英幸	情報教育、コンピューター等の有効活用と実践研究	東海方面	１１月
日野小	山本　朗	教科指導（生活科）で児童のとらえと支援のあり方	静岡・安東小	１０月中

学ぶに如かざるはなし
～同好会発足に当たって～

同好会長　高野　重治

孔子は『論語』の中で、「子曰く、吾かつて終日食わず、終日寝ねず、以て思う。益なし、学ぶに如かざるはなし」といっております。

私たちは、何はさておきまず常に学ばなければならないと思います。教育への情熱、豊かな人間性、専門分野の深い知識と指導技術の三つを兼ね備えた教師が「望ましい教師」であると思います。

このことは一朝一夕に身につくものではありませんが、謙虚に誠実に「自分を磨く努力を続ける毎日」でありたいと思います。

上高井教育会が教科研究を進める研究委員会活動と、同好会の活動を重要視しているのは、まさに教師のあるべき姿を具現していく活動そのものであるからであります。

教育改革を求められ、急変する現代教育界にあって、私達は、とかく目の前に見えることのみに気をとられ、教師としての生き方の根本を育てることを怠っていないだろうかと自省する毎日であります。

さて、今年は十五の同好会に延べ二百八十九名の会員で発足しました。

上高井教育会の同好会活動は、『上高井教育のあゆみ』によれば、「教育会の正規の事業として組織的に『同好会』が位置づけられたのは昭和二十八年ということになるが、同好の士による研修活動はかなり以前から行われていたのである」とあります。そうした以前からのものの中で一番歴史のあるのが、「哲学会」「文芸会」であります。次いで、美術同好会も長い歴史を持ち、戦後精力的な活動を展開してきております。

活動の中心の一人であられた森山明治先生は「同好会の活動にも波がある。物凄く活発にそして充実していたときもあったし、沈滞して、会を持つに当たって人の集まりを気にしなければならない時もあった。…そして、そんな中でお互いが育ってきたことを心して、次代に引き継ぐ心用意をしなければならないと思う」と述べられています。

今年は「哲学同好会」の人数が最初は僅かに二名ということで伝統の灯を消してはと心配しましたが、さいわい先生方のご理解により、今年は十三名の会員で発足できました。

同じ目標に向かって研修する仲間と共に、良き師に学びながら、積極的に活動に参加して、明日への発展を期したいものであります。（高山中）

カウンセリング同好会

山岸　敬明

本年度十三名をもって発足しました。日頃疑問に思うことを中心に、自分の悩みや実践上の困難なことを自由に説明し、話し合いの素を探り、深めることを目指して、進めております。

本年度の活動内容は次の通りです。今年は緒についたばかりですが、昨年に準じて考えております。

一「カウンセリング入門」佐治守夫著（国土社）読み合わせ。主に二学期を充て、カウンセリングの基本、友人の少ない子どもに焦点を合わせていこうと思っています。

二　松本文男先生の講演会

夏休み前後を予定しています。ここ数年テーマを一定の方向に絞ってお願いしています。「不登校の背景」「心身症の因と対応」等についてご講演をお願いし研修としています。不登校に対処する方法として、脳波を一定の状況に保つこと、そういう状況を共有する必要性、生きるエネルギーを消失させている子どもが多いこと。エネルギーを高めるには家庭の要素が多いこと。など昨年の講演の中で話されたことでした。今年もぜひ大勢の会員の参加を希望しています。

三会員相互の抱える問題の話し合い。

諸例をもとに、現代社会の抱える問題にも話が及ぶこともある自由な雰囲気の中で研修を進めております。

文字通り同好の士の集まりですが、難しい話や理論の追究ではなく、身近の問題にどう対処しているか、子どもの行為のどこに目を配ることが良いのか地味な実践を話し合うことによって、自己の知識や子どもの行為を自信を持って見守ることができれば良いと考えています。教育心理同好会の皆さんに参加を願った講演会を持ったこともあります。できたらもう少し参加人数が多ければ活動に力が入るかなとも思います。また機会を見て、施設の見学や相談方法の研修をなどを考えていきたいと思います。（高山中）

本校の宝

墨坂中学校

本校の宝とは何だろう。建て替えられたばかりのピカピカの校舎か。いや校舎は、下座に膝をついて磨いてはいるが宝ではない。中庭には三十周年を記念した「実生」という少女のブロンズ像と校舎改築を記念した少年のブロンズ像「遥か」があるが、大事にはしているが宝ではない。

墨坂には、現代の学校が一番欲しがっている宝が二つある。それは体験教室とティームティーチングである。墨坂中は体験学習を大切にしている。体験学習とは「体を動かして汗を流すこと」ではない。汗は校庭を走れば流れるものである。体験とは「人の生き方と気概」を学ぶことである。その象徴的なことは、立志式と職場体験学習である。「人生の劈頭たゞ一箇の事あり立志これなり」。十五歳の子供に何を教えるか。「あらゆる犯罪の根源は死の真実を義務教育で教えない点にある」という。一昨年は「死の教育は生の教育」エイズについて涙を流して勉強した。昨年は「恕の心」障害者に学ぶ学習をした。そうして、職場体験学習では、例えば、動物園の飼育係など動物が好きなら誰でもなれると思っている生徒が「動物が病気の時はウンチをなめてやる」と飼育係のおじさんから教わった。もう涙である。感動が人を動かすのである。だから墨坂の生徒は輝いているのである。

もう一つの宝は、二人担任制というティームティーチングである。学級においても、悩みのある一人の子どもに対してもしっかりとしたティームティーチングがある。これはそれぞれの職員がしっかりと持ち場を守っていることである。それが墨坂の宝であり、誇りである。

「国宝とは何ものぞ
宝とは道心なり
道心ある人名づけて国宝
となす
径寸十枚国宝に非ず
一隅を照らす
これ即ち国宝なり」

前後おのおの十二分に照らす十個の珠よりも、優秀な四人の臣下が国の一隅を守っているのが千里を照らすというのだ。

立派な校舎は自慢だが、宝ではない。それぞれに一隅を照らしている生徒と職員が宝である。それが墨坂の宝ではなくて、他に何があろう。私はそんな墨坂に暮らしていることに誇りと感謝の日々である。（堀田　実）

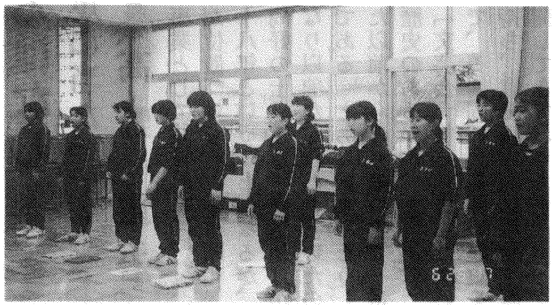
火ばち談義

新鮮な気持ちで

山岸由美子

今年から上高井地区に転任となった。早いものでもう三校目である。転任すれば、もちろん校務分掌も変わるのは当然のことであるが、それにしても今、頭を悩ませている。

何がこんなに私の頭を悩ませているのかというと『部活』である。とにかく私には何も特技がない。趣味らしい趣味もなく、運動・芸術共に人並みにできることが何もない中学時代の私の体育・音楽の成績は最高でも『3』しかもらったことがなく、しかも技能でなくまじめさでもらった点である。その私が『合唱部』の顧問になった。音符は読めないし、指揮棒も握ったことすらない。途方に暮れてしまう。しかし、子供たちは素晴らしい。自分の生徒を自慢するのはおこがましいが、高い理想を持って熱心に取り組んでいる生徒たちである。三年生を中心にパート練習を進めたり、全体練習でも部長を中心に意欲的に取り組んでいる。顧問の足りないところを十分に補ってくれる生徒たちなのである。とは言え、コンクールも目前、顧問も奮起しなくては。音痴ではあるが、歌うことは好きなので、時々音をはずして生徒に迷惑をかけながらも一緒に歌ったり、音楽科の先生に指揮法を教えていただき、必死で棒を振っている。私の合唱部は始まったばかり。悩みながらもとにかく進むしかない。（東中）



若気の至り…？

花岡美紀子

教職二年目、決して忙しがっているつもりはないが、何かを置いてきてしまっているような気がする時がある。学生の時に、何かこう、純粋に思い描いていた自分の将来の姿から遠のいているような…。

座右の銘ではないけれども、一度心にとめた話がある。

「…方面の子供たちが弁当に焼き餅を持ってきたのを皆がひどくおかしがって笑った。これを見た先生は、翌日から自分でも焼き餅を持ってきて『うまいぞ、うまいぞ。』といいながらおいしそうに頬ばりながらそれとなく皆を戒めた。それからは誰も笑うものがなかったという。」（池田小学校沿革史）

この「先生」とは久保田俊彦ー歌人として有名な島木赤彦である。赤彦は一方で、教育者として手腕を奮い、その後の長野県の教育界に少なからず影響を及ぼした人物でもあった。

学生の時、このようなエピソードにいくつか触れた際、「こんな先生になりたいな。」と密かに思った。笑われた子どもを気遣うと同時に、笑った子どもに対する心遣いも忘れないー心に染み入るような叱り方だと感じる。子どもを信頼しているからこそできることである。

心に染み入るような叱り方が私にできているのだろうか。

思えば、実習の時、そして初任者としての一年間、一番悩んだことがこの「叱り方」だった。つい、見たこと聞いたことにすぐ叱り飛ばしてしまう。「何か違う。」と思いながら大声を出す。時には必要だとしても、何となく「自分はこの子を信用していないな。」と感じる。若気の至りなんていっていられない。厳しさも子どもに対する信頼の上に立ったものでありたい。叱る時こそ子どもの心を見ていなければーと思う今日この頃です。（栗が丘小）

笑う教室に福来たる

滝澤日砂子

「あ！先生が倒れてる。よし、ここでギャグを一発。『布団が吹っ飛んだ！』」

気温が三十度を超えた日の業間は、ひんやりと冷たい廊下にはりついています。どうせならもう少しハイレベルな洒落で起こしてもらいたいと思うのですが、なぜ毎回同じ手に引っかかるのでしょうか。

『ユーモアは、人生の饗宴におけるもっとも大切な調味料である』と言った人がいます。確かこの続きは『自分の失敗を笑い、そこから何かを学べ』だったと思いますが、なかなかそこまで至りません。

教室の窓を開け放しておくと、時々お客さまがやってきます。

「あっ、ハチだ!!」

「待って。ハチって何もしなければ刺さないんだよ。」

「そうだよ。お母さんもそう言ってたよ。」

「こういう時こそ、九九クイズだ。西の方向から来た虫は、何匹いたでしょう？」

「二四が八!!」

どう見ても一匹しかいない蜂は、頭上を旋回すると悠々去っていきました。さあ漢字の練習に戻ります。次回は虫へんのつく漢字でも集めましょうか。

こちらに余裕がない時は、子どもも難しい顔をしています。極力まじめな顔をしていても目がかまぼこ型になっていると、この先生何か始めるなとわかるようです。期待に満ちた視線の中で始業のあいさつをするのも楽じゃありません。どうやってこの授業に引き込もうか。用意した教具で足りるだろうか。今から変更はきくか。足りないとしたら、必要なものはどこにあるか。一瞬の緊張が過ぎると、あとはいつもの通りです。

教科書ノート一式忘れようが空の筆箱を持って来ようが、あるはずだというプリントが複数で探しても見当たらなかろうが、四十五分の中で一度は皆が笑顔になるよう、心がけています。（旭ケ丘小）

編集後記

新たな気持ちでスタートした今年の一学期も終わろうとしています。

お忙しい中、原稿をお寄せくださった先生方、本当にありがとうございました。

本年度は、次のメンバーで会誌・会報をお届け致します。

委員長　越　忠男（小山小）
副　〃　市川　武彦（墨坂中）
委　員　倉石　久子（須坂小）
〃　長井　裕之（日滝小）
〃　中沢由紀雄（小山小）
〃　藤沢　隆之（旭ケ丘小）
〃　小山　聖子（高山中）
〃　佐藤　玲子（相森中）
〃　高野喜久夫（常盤中）
〃　畑中恵美子（東　中）
（倉石・畑中）